シャトーブリアンChateaubriand　管見Ⅳ（続1）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2011-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内海, 利朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10948

明治大学教養論集　通巻454号
（2010・3）pp. 61-93

シャトーブリアン Chateaubriand 管見Ⅳ（続１）

内　海　利　朗

Ⅱ。オノンダガス族たち les Onondagas の概要（PP. 685-693）

イロクオイス部族の小部族 peuplade iroquoise であるオノンダガス族たちが彼らの名前を与えた湖のほとりにわれわれは到着した。われわれの馬たちには休息が必要である。私は自分のオランダ人と一緒にわれわれの野営地を設定するのに適当な場所を選んだ。われわれはひとつの川がその湖から泡立ちながら出ている場所にある、ひとつの峡谷にその場所のひとつを見出した。その川は、湖に対してベルトの役割を果たしている岩山の外側で、東に折れ曲がり、そして湖の岸に平行して流れているので、１００トワーズ toises（1 トワーズ＝1. 95m）とは北に直線では流れてはいなかった。

われわれが自分たちの夜の準備を整えたのは川の曲がり角の所であった：われわれは地面に二本の高い杭を打ち込み；われわれはこれらの杭の二叉になっている所に、水平に一本の長い棒 perche（f）を置き；樺の幾枚もの樹皮を、一方の端を地面で、他方の端を横断する長い棒 la gaule で支えて、われわれは自分たちの建物 notre palais にふさわしいひとつの雨露を凌ぐ所 un toit を設けた。旅に不可欠な薪の山にはれわれの夕食を準備したり、群れをなす蚊たち les maringouins を追い払うために火が点けられた。われわれの鞍は“掘っ立て小屋” l'ajoupa の下では枕の代わりに、われわれの外套は毛布の代わりになった。われわれは自分たちの馬の首に鈴を付け、

そしてわれわれは馬たちを森林地帯に放した。見事な本能でこれらの動物たちは害虫を追い払い、そして蛇から身を守るために、彼らの主人たちが夜間灯している火を見失う程遠く隔たった所にまでは決して離れない。

われわれの住まい notre hutte の奥から、われわれは絵になるような眺めを楽しんでいた：われわれの前にはかなり狭い、森や岩山に縁取られた湖が拡がっており；われわれの周りでは緑色の、澄み切った波でわれわれの小さい半島を包み込んでいる川がその岸辺を激しくさっと通り過ぎていた。

われわれが設営を完了した時には、午後には殆ど四時間しか無かった：私は銃を取り、周辺地帯に彷徨いに出掛けた。私はまず川の流れのあとを追ったが；私の植物研究は幸運ではなかった：植物はあまり変化に富んでいなかった。私はオオバコ planto virginica やすべてがかなりありふれた草原の他の幾つもの美しさをなしている数多くの植物の種類 familles に注目した：私は湖の岸辺に向かって川のほとりを離れたが、その結果私はそれまで以上に運が良くなかったし；一種の石南花（シャクナゲ）rhododendrum を除いて（cf. P. 1286 の注，P. 686 の 1. R. スウッツアーSwitzer がそう言うように—op. cit.，P. 105. n. 1—. 石南花がこの地域に生えていないのが本当なら，チェロケース族たち Cherokees の国で，そのひとつが《濃いバラ色の大きな花》をつけている幾つかのその変種を見ているバートラム Bartrum—op. cit.，t. II，PP. 95，99，105 など—によってシャトーブリアンが影響されたと考えられる．シャトーブリアンは他の旅行者たちの様々な観察を利用しているものの，それらの地域やそれらの部族たちについてはまあまり正確でないことを示している）、私はわざわざ足を止めるに値するものは何も見出せなかった：生き生きとしたバラ色のその小潅木の花々はそれらがそこに映っている湖の青い水や、それらがそれらの根を深く差し入れている岩山の褐色の脇腹に対して魅力的な効果を発揮していた。

鳥たちが殆どいなかった：私は自分の前を飛び回り、これらの風景の不動の状態と冷淡さに対して愛を撒き散らすことを好んでいるように思われる孤独な一番（ひとつがい）に気付いた。牡の色彩が“白い鳥”または鳥

類学者たちの“雪のように白い雀”le passer nivalis を私に認めさせた。私はあの種の尾白鷲 orfraie の声を耳にした。その鳥は動きを好む：私はその追跡に苦労したが虚しかった。

この尾白鷲の飛翔は森林地帯を横切って、樹木の無い、石だらけの幾つもの丘によって狭められている小さな谷まで私を連れて行ってしまっていた。非常に人里離れたこの場所には幾つもの岩山の間にある山の中腹に建てられている未開人の一軒のみすぼらしい小屋が見られた：痩せた一頭の牝牛がその下の草原に姿を見せていた。

自分の歩行に疲れて、私は自分が歩き回っている小さな丘の上で座り、反対側の小さな丘の上にあるインディアンの小屋を正面に見据えていた。私は自分のそばに銃を横たえ、そして私がしばしばその魅力を味わった夢想に身を委ねた。

私が小さい谷の奥で幾つもの声を耳にした時には、私は辛うじて数分過ごしたばかりであった。私は五・六頭の肥えた牝牛を連れている三人の男に気付いた。草原でそれらに草を食わせるようにしたあとで、彼らは痩せた牝牛の方に向かって歩き、それを彼らは棒で叩いて遠ざけた。

こんな人気の無い場所へのこれらのヨーロッパ人たちの出現は私にとってこの上なく不愉快で；彼らの乱暴な態度は彼らをさらに一層煩わしいものにした。彼らは大声で笑い、哀れな獣を両脚が折れんばかりに危険に晒しながら、それを岩山の間に追い払った。外見上、彼女の牝牛と同じように惨めな未開人の女が一人孤立した小屋から出て来て、脅えた動物の方へ進み、優しくそれを呼んで、そしてそれに何らかの食べ物を与えようとした。その牝牛は喜びの小さい啼き声を出して首を伸ばしながら彼女の所へ駆けて行った。植民者たちは遠くからインディアンの女を脅し、彼女は自分の小屋に戻った。牝牛は彼女のあとについて行った。彼女は戸口で立ち止まり、そこで牝牛の女友達は片手で牝牛を愛撫し、一方喜んでいる動物はその女の手をなめていた。

私は立ち上がった：私は丘を降り、小さな谷を横切り、反対側の丘を改めて登って、白人たちの粗暴さを私の出来る限り償う決心をして、あの小屋に着いた。牝牛は私の姿を認めて、逃げようとして動いたが；私は用心深く進み、牝牛はそれ以上動かずに、私はその女主人の小屋まで辿り着いた。

インディアンの女は自分の家に戻っていた。私は教えられた“私はやって来ました！”Siègoh という挨拶を述べた。慣用の反復によって、“あなたはお出でになった”、と私の挨拶に返礼する代わりに、インディアンの女は何も答えなかった。私は彼女の暴君たちの一人の訪問が彼女には迷惑なのだと判断した。そこで私の方が牝牛を愛撫し始めた。インディアンの女は驚いた様子であった：私は彼女の黄色い、悲しそうな顔の上に感動と殆ど感謝の気配を見た。不幸な出来事の結果としてのこうした不可思議な人間関係は私の両眼を涙で満たした。

私の女主人は私が彼女を騙そうと努めているのではないかと恐れているように、なおしばらくは疑いを残して私を見つめたが；ついに彼女は数歩進んで、そして彼女自身で彼女の貧困と孤独の仲間の額に片手を差し伸べに来た。

この信頼の証しに勇気づけられて、私は英語で《あの牛はとても痩せている》と言ったが、それというのも私は自分のインディアン語を使い果たしていたからであった。インディアンの女は間もなく下手くそな英語で即座に返答を返した：《彼女は非常に僅かしか食べていないのです》She eats very littre と。《彼女は手荒く追い払われたんだね》、と私はまた続けた：《私たちは両方共 both そんなことには慣れています》、とその女は答えた。私はさらに続けた：《あの牧草地はそれじゃあなたのものではないのですね》、と。彼女は答えた：《あの牧草地は私の夫のものだったのですが、彼は死にました。私には子供がまったくおりませんので、白人たちは私の牧草地に彼らの牝牛たちを連れて行っているのです》、と。

私はこのインディアンの女に提供すべき何も持っていなかったし；私の

意図は彼女のために正義を要求すること位だったかもしれないが；しかしヨーロッパ人たちとインディアン達が混在していることが権限を混乱させており、そこで力の道理が未開人から独立性を奪っており、そして半ば未開になった文明化されている人間が市民の権利の支配に打撃を与えている地方では、私は誰に訴えかければよかったのか？

われわれ、私とインディアンの女は互いに握手し合って別れ別れになった。

私は自分の天幕 ajoupa に戻り、私はそこでかなり惨めな夕食をした。晩はすばらしく; 湖は深い休息の中でその水面にさざ波ひとつ立てず; まだ色褪せていないエニシダ faux ébéniers が飾っているわれわれの半島を川が微かな音を立てながら浸しており；“カロリーヌ達のカッコー” coucou des Carolines と名付けられた鳥がその単調な囀りを繰り返していた：われわれはその鳥がその恋の叫び声の場所を変えるに従って、ある時はより近くで、ある時はより遠くでそれを耳にしていた（cf. P. 1286 の注，P. 689 の 1，その章の始めから，その本文は若干の変更を加えて，『回想』の livre II の四章に再び見出される．その続きは若干の加筆と共に—特に老人の人物描写において—，五章を構成することになる）。

翌日、われわれはオノンダガス族たちの筆頭の長老 le premier Sachem を訪問しに出掛けたが、その村は遠くはなかった。われわれはその村に朝の十時に到着した。私は間もなく若いたくさんの未開人たちに取り巻かれたが、彼らは英語の文章と若干のフランス語の単語を交えながら、彼らの言語で私に話しかけた:彼らは大騒ぎし、そしてとても嬉しそうな様子をしていた。これらのインディアンの部族 ces tribus indiennes は白人たちの開拓地に取り囲まれていて;われわれの生活習慣の多少のものは身に付けていた：彼らは馬たちや羊たちの群れを持っており、彼らの家々は一方ではケベックやモントリオールやナイアガラやデトロイトで;他方では合衆国の諸都市で買われた家具や家庭用品で一杯になっていた。

オノンダガス族たちの筆頭長老はどこから見てもイロクオイス族の一人

の老人であった。彼の容姿は荒野の古くからの慣習やかつての時代の面影を保持していた：縁がぎざぎざになっている大きな両耳 grandes oreilles découpées、鼻からぶら下がっている真珠、様々な色で塗りたくられている顔、頭のてっぺんの髪の毛の小さな房（ふさ）、青い円筒型の上着、革の外套、頭髪付きの頭皮 scalpe—アメリカ・インディアンが戦利品として敵の頭から剥ぎ取ったもの—に用いる小刀の付いたベルトと斧 le casse-tête、入れ墨を施された両腕、両足の毛皮靴 mocassines、手作りの磁器の数珠（じゅず）または首飾り（cf. P. 1286 の注. P. 689 の 2. 同じような詳細な描写が一人の青年の手に成るものとされて,『試論』の中に—IIe partie, chap. LXI, éd. cit., P. 44—すでに見出されていた. シャトーブリアンは『総括的な諸旅行談義』t. XV, PP. 39-40 から着想を得た）。

彼は私を快く迎え入れ、そして私を莫蓙の上に座らせた。若者たちは私の銃を独占し;彼らは驚くべき巧妙さでその装置を分解し、そして同じような手先の器用さで部品を元に戻した：それは有り触れた猟銃であった。

長老は英語が話せたし、フランス語も理解出来たし；私の通訳はイロクオイス語の知識があるので、従って、会話は容易であった。未開人たちはフランス人たちを遺憾に思っていることをやめてはいないと彼は私に断言し；その祖先が彼らに残しておいてくれたものすなわちそれらの骨を埋める couvrir のに必要な十分な土地を間もなく残さなくなるであろうと彼はアメリカ人たちに不満を表明した

私は長老にあのインディアンの未亡人の困窮のことを話した：確かにその女は迫害されているのであり、彼は幾度も彼女のことについてアメリカの公安官たち les commissaires に嘆願に行って来たが、彼は自分の正しさを認めさせることが出来なかったと私に言い：イロクオイス族たちは昔ならそうしてもらえたであろうと付け加えた。

インディアンの女たちはわれわれに食事を出した。もてなしはヨーロッパ文明の様々な悪徳の最中に置かれているインディアン達に残されている

最高の美徳である：昔そのもてなしがどのようものであったかを人々は知っている：一度ある家 une cabane に迎えられると、迎え入れられた者は神聖にして犯すべからざる者になっていた：家庭は祭壇の力を持っていたので；それが客を神聖化したのである。

その林地帯から追い出された時に、または一人の人間が避難所 l'hospitalité を求めに来ると、そのよそ者は嘆願者 le suppliant の踊りと呼ばれるものを始めた。その踊りは次のようになされた：嘆願者は数歩進み、ついで嘆願される者を見つめて立ち止まり、そして次に最初の位置まで後ずさりした。そこで迎える側の人々はよそ者の歌の初めの一節を歌って見せた：《ここによそ者がいる、ここに偉大な精霊から遣わされた者がいる》、と。その歌のあとで、一人の子供が彼を家 la cabane に連れて行くためによそ者の手を取りに行った。子供が戸口の敷居に触れると、子供は言った：《ここによそ者がいます》、と。そして家の主は答えた；《子供よ、その人を私の家 ma cabane に入れなさい》、と。すると、子供に守られて入って来たよそ者は暖炉の所に座りに行った。彼には平和のパイプが差し出され；彼は三度煙を出し、そして女たは慰めの歌を口にしていた：《よそ者は一人の母親と一人の妻を再び見出した：太陽は以前のように彼のために昇り、そして沈むであろう》、と（cf. P. 1286 の注，P. 690 の 1. ここで『回想』の livre VII の五章に再び見出される記述は中断する．続きは六章で使用されることになる）。

楓の水で聖なる盃が満たされた：それは通常暖炉の隅にそっと置かれ、その上に花の冠が載せられている瓢箪または石の壷であった。よそ者はその水の半分を飲み、そしてその杯を彼の主人に移し、主人はそれを空にしてしまった。

オノンダガス族の首長への私の訪問の翌日、私は自分の旅を続けた。その年老いた首長はケベック攻略に加わっていたことがあった：彼はウルフ将軍 le général Wolf の死を目撃していた—ケベックは 1759 年にイギリス人たちによって攻撃された．ウルフ将軍はウエスターハム Westerham 生まれのイギリスの将軍．

1725-1759．それに対抗して戦ったフランスの将軍は侯爵のモンカルム将軍 le général Montcalme 1721-1759 で，ガルス Gars 地方のカンディアック Candiac で生まれた．両者は華々しく戦い，共にケベックの城壁の下で戦死を遂げた―。

われわれがナイアガラに進むにつれて、街道は、ますます骨の折れるものになって、木々の伐採された堆積によって辛うじて道であることが示されていた：それらの木々の幹が湿地においては幾つもの小川の上では橋のまた幾つもの水溜まりでは柴の束の役割を果たしていた。アメリカの住民は当時ジェネゼ Génésée（？）の払い下げ地の方へ向かっていた。合衆国の諸々の行政管轄区域 gouvernements はそれらの払い下げ地の土壌の良さ、木々の質、河川の流れ、その多さに従って高さの違う値段で売っていた。

開墾地は自然のままの状態と文明化された状態の奇妙な混交を示していた。未開人の叫び声や野獣の騒ぎ以外の音のするものはまったく無いひとつの林の片隅で、人々は耕された土地に出会ったり、一人のインディアンの小屋 la cabane や一人の植民地の栽植農園主 un planteur の住居 l'habitation が同じ視野のうちに認められた。すでに完成されているそうした住居の幾つかはイギリスやオランダの農家の清潔さを思い起こさせ；他の幾つかのものは半ばしか仕上がっておらず、屋根としてはひとつの幹の高い木の集まり une futaie である丸屋根の外側 le dôme しか持っていなかった。

ある日、私はそうした住まい ces demeures に迎え入れられ、私はそれらにヨーロッパのあらゆる魅力とあらゆる優雅さを備えた、感じのいい一家族をしばしば見出しており；それらの家に備えられているものはマホガニーの幾つもの家具、一台のピアノ、絨毯、幾つもの鏡といったもので；それらすべてが一人のイロクオイス族の小屋 la hutte から数歩の所にあった。晩には、鉞（まさかり）や犂（すき）を持って、従僕たちが林や畑から戻ったあとで、窓が開かれ；私の宿主の娘たちはピアノの伴奏で、パエシエッロ Paësiello―タレンテ Tarente 生まれのイタリアの作曲家 1741-1815―やチマローサ Cimarosa―イタリアの作曲家．ナポリのカロリーヌ王妃 la reine Caroline の命令で毒

殺されたと言われている. 1749-1801—の曲を、荒野を眺め、そして時折滝のざわめきを交えながら歌っていた。

これらの最良の土地で、小さい幾つもの村々des bourgadesが出来ていた。アメリカの古い森の内部に、新しい鐘楼の尖塔のそそり立つのを見て、人々の感じる気持や悦びが如何なるものかをにわかに判別することは出来ない。住民たちのいた跡の無い様々な地方を横切ったあとで、イギリス人たちは到る所でイギリスの諸々の生活習慣を離れないので、私は道のほとりで木のひとつの枝に吊るされていて、そして人気の無い場所の風が揺り動かしている宿屋の看板に気が付いた。猟師たち、農場主たち、インディアン達がこうした安宿 ces caravansérailsで出会っていたが；私がそうした場所のひとつで休息した最初に、私はそれが最後になるであろうと固く心に決めた。

ある晩、こうした奇妙な旅籠屋に入ると、私は一本の柱の周りに円を描いて設えられた馬鹿でかい寝台を見て唖然とした。各々の旅行者は眠る人たちがひとつの車輪の輻（や）または扇の桟（さん）les bâtonsのように、左右均整に並べられるような具合に、中央の柱に向かって両足を出し、そして輪の周辺に頭を置いて、その寝台に場所を占めるようになっていた：だがそこには誰もいなかったので、しばらく躊躇したのち、私はそのからくり cette machineの中に入り込んだ。私が自分の脚に沿って身を滑らせる一人の男の両足を感じた時に、私はまどろみ始めていた：私の周りに伸びて来るのはたちの悪いあの大柄のオランダ人の足であった。私は自分の生涯でこれ以上大きな恐怖を感じたことは一度もなかった。私はその歓待を受ける籠 ce cabas hospitalier（＝寝台）を飛び出し、私の祖先たちのそのような習慣をひどく呪った。私は月光のもとで、外套の包まれて眠りに行った。旅人のその寝台の道連れはいずれにせよ快いもの、爽やかなもの、清らかなものは何も持ち合わせてはいなかった。

手書きの原稿がここで欠けている、あるいはそれが含んでいるものは私

の他の諸著作の中に挿入されてしまっている。幾日か歩いたあとで、私はジェネゼ川に到着し；私はその川の対岸でフルートの音によって魅了されるガラガラ蛇 le serpent à sonnettes の不思議な現象を目にし（—脚注．A.『精髄』—．1286 の注，P．692 の 1.『精髄』，éd cit.，P．532，P．746 の注 2 を見ること）：もっと先で、私は未開人の一家族と出会い、そして夜になって私はその家族と一緒にナイアガラの滝から少し離れた所に移る。『試論』や『精髄』の中に、その出会いの話しやその夜の記述が再び見出される（cf. P. 1286 の注，P．692 の 2.『試論』—IIe partie，chap．L VII—，éd．cit.，PP．443-447；『精髄』—Ire partie livre V，chap，XII—，PP．591-592.）。

ナイアガラ瀑布の未開人たちは、イギリス人たちへの従属の中で、こちら側の高地カナダ le Haut-Canada の境界の監視を委ねられていた。彼らは弓や矢で武装して、われわれの前にやって来て、われわれが通行するのを妨げた。

私はオランダ人をナイアガラ砦に派遣し、イギリス支配の土地に入るために司令官の許可を求めることを余儀なくされたが；そのことは私の心にやるせない思いをさせており、それというのも、フランスがかつてはこれらの地方で指揮権を発揮していたことを私が考えていたからであった。私の案内人は許可証を持って戻って来た：私はなおもそれを保持しているが；それには中隊長 Gordon ゴードンと署名されている。私がエルサレムで、私の個室の前の戸口に同じイギリス人の名前を再び見出すことになったのは奇妙なことではなかろうか？（—脚注．『パリからエルサレムへの道』Itinéraire de Paris à Jérusalem—．ならびに cf．P．1288 の注，P．693 の 2．tombe II，PP．1001 と 1089 を見ること）。

私はは二日の間未開人たちの村に留まった。手書きの原稿はその場所で私がフランスにいる友人の一人に書いた手紙の元の形を示している。以下の通りである。

ナイアガラの未開人たちの所から認められた手紙（cf. PP. 1287-1288 の注, P. 693 の 1. 1.《ナイアガラの未開人たち》からの本文は『回想』livre VII. chap. VI et VII に利用され，手直しされ，そして再改編されている．特にこの手紙は直接的な記述となっている．/長い間その手紙は架空のものと思われていた．実際にはそれは，整理番号:Ms. fr. 12455, fol. 23-25 において，国立図書館に保管されている手書きの本文がそれを証明しているように，マレゼルブに宛てられたものであった．問題となるのは Ed、ブリコン Bricon によってなされたひとつの控えである．われわれはシャトーブリアンが『紀行』において再び採り上げなかった一節を完全に再現し，そして残余のものについては，われわれは異文を示す．M. O. -T. —VII, 8, t. 1, P. 243—において，シャトーブリアンは彼が《二日間インディアンの村に》留まり，《そこでドゥ・マレゼルブ氏にさらに一通の手紙を認めた》と言っている，その手紙は今や la Correspondance générale, t, I, PP. 60-63 に見出される：《私はフィラデルフィアとニューヨークから私の著名な，尊敬すべき師に手紙を書き;私は彼にわれわれはこれまで長い横断をして来たのに、それでも私はこれまでに私の旅に対して助言も励ましも得られなかったと言った：私は旅が挫折ではないか，それが荒野における探検に過ぎないのではないかということをとても恐れいますが、しかし結局それは私が送らなければならない生活に私を慣れさせるでしょうし：私は北極のアメリカのクリストフ・コロンブスになる前に林の放浪者になるでしょう．さらに私は自分が目にしているものに満足していますし，そしてもし探検者が悩んでも，詩人は満足します．私は様々な植物を採集することに努めますが，しかし私はそれに精通してはいませんし，そして人々は私を無視するでしょう》．《私は今，私には自分がそばにいるように耳にしているナイアガラから五・六里のナイアガラの未開人たちの所にいます》．/《あなたは『エミール Emile』の校正刷をごらんになった：何故あなたは教育が問題になっているひとつのページに目を注がないのですか？ 私を小さいジャン・ジャック（＝ルソー）として取り扱ってください：私は彼のように高くは立ち上がれないでしょうし，そして私はあなたにイロクオイス族の子供たちのことだけを話しましょう．私は自分を迎え入れた人々の所で正に今朝起こったことをあなたにお話ししなければなりません．[－－－]》．/《しかしどのような様々な出来事の最中でこれらの

細部があなたを驚かせるようになるのでしょうか？ そして私には林の奥で書かれているこの手紙がいつかあなたの所に届くかどうかが分かるでしょうか？ どうか，あなたの孫娘さんやあなたのご兄弟に対する私の数々の思い出と私の親愛の情をお伝え下さい．さようなら.》).

私はあなたに私を迎え入れてくれた人々の所で昨日の朝起こったことを語らなければならない。草はまだ露で覆われていたし；風はたっぷり芳香を放って森林地帯から吹いて来ており、野生の桑の木の葉の茂りは一種の蚕の繭に覆われており、そしてその地方の綿花植物たちは、それらの開花した蒴果（さくか）capsules を逆さにして、白い薔薇の木々 des rosiers に似ていた。

インディアンの女たちは一本の太い深紅色のブナ un hêtre の根元に一緒に集まって様々な仕事に従事していた。彼女たちの乳飲子たちは葦の繁みで木々の枝に吊るされていた：林地帯の微風が殆ど感じられない動きで林地帯の空気の層を静かに揺すっていた。母親たちは時々彼女たちの子供たちが眠っているかどうか、そして彼らがその周りで囀り、そして飛び回っている多数の鳥たちによって少しも目を覚まされなかったかどうかを見るために立ち上がっていた。その光景は魅力的であった。

われわれ、通訳と私は、七人の数となる兵士たちと共に離れて座っており；われわれは皆口に太いパイプを咥えていた：それらのインディアン兵士たちの二・三は英語が話せた。

少し離れた所で、若い男の子たちははしゃぎ回っていたが；しかし彼らの遊びの最中で、跳び撥ねたり、走ったり、ボールを投げたりしても、彼らは一言もことばを発しなかった。ヨーロッパの子供たちの耳を聾せんばかりの喚き声が少しも聞かれず；それらの若い未開人たちは鹿たち des chevreuils のように跳び撥ね、そして彼らは鹿たちのように無言であった。七・八歳の一人の大柄の男の子は時折グループから離れて、自分の母親の

乳を吸いに来て、そして自分の仲間の方に遊びに戻って行った。

子供は決して無理矢理に離乳させられず；他の食べ物を摂取したあとで、響宴ののちに空にされる盃のように、彼は自分の母親の乳房を消耗させる。部族集団全体が飢え死ぬ時にも、子供はなおも母親の乳房に生命の泉を見出す。

父親たちが子供たちに話しかけ、そして子供たちは父親たちに答えた：私は自分のオランダ人によって対話を理解させてもらった。次のようなやり取りが交わされたのである：三十歳くらいの年頃の一人の未開人が自分の息子を呼び、そして息子にそんなに力一杯跳ねないように求めたところ；子供は“分かりました”、と答えた：だが子供は遊びに戻っても、父親が彼に言ったことには従わなかった。

今度は子供の祖父がその子を呼んで、そしてその子に言った：“言われた通りにしろ”、と。そしてその小さい男の子は従った。父親は子供にとって殆ど何者でもない。

子供には決して罰は加えられず；子供は年齢の権威や自分の母親の権威のみを認める。

インディアン達の間でおぞましい、そして前例の無いと見做されているひとつの罪は自分の母親に反抗する一人の息子の罪である。彼女が年老いた時には、息子は彼女を扶養する。

父親に関しては、彼が年老いていない限り、子供は彼のことを考慮に入れないが；しかし彼が年を取る時には、彼の息子は、父親としてではなく、老人、つまり良い助言の出来る、経験豊かな老人として彼を尊敬する。

彼らの全くの自由の中で子供たちを育てるというこのようなやり方は、子供たちを気分と気まぐれに陥り易い者にせざるを得ないが；だが未開人の子供たちは彼らが得ることが出来ると知っているものだけを望むので、気まぐれや気分とは無縁である。もし未開人の子供が誰にも従わない場合には、誰も彼には従わない。

インディアンの子供たちは少しも喧嘩をしないし、彼らは騒々しくないし、怒りぽくもない。

若いインディアンは自分の中に漁や狩猟や政治に対する興味が生ずることを感じると、彼は自分の父親がしているのを見て、技法を学び模倣する：かくして彼はカヌーを造り上げたり、網を編んだり、弓や銃や棍棒や斧を自在に操ったり、木を切ったり、一軒の小屋 une hutte を建てたり、首馬具類 les colliers の説明をしたりすることを学ぶ（cf. P. 1288 の注. P. 695 の 1.『ナチェーズ族』. P. 186 ならびに注を見ること）。息子たちにとって愉快なことは父親に対して一人前になることである。父親の力と知能が優れていることは世間で認められていることであり、その力量が長老への権威へと父親を導いて行く。

娘たちも男の子たちと同じ自由を味わう：彼女たちは殆ど彼女たちの望むことをしているが、しかし彼女たちはもっと長く彼女たちの母親と共に家にいて、母親たちは彼女たちに家事の色々を教える。若いインディアンの女が悪い振る舞いをすると、彼女の母親は彼女の顔に水の滴（しずく）をかけ、“私に恥をかかせた”、と言ってことを済ませる。その非難はめったにその効果を発揮しない（cf, P. 1288 の注, P. 695 の 2.『アタラ』, P. 62 ならびに注）。

われわれは正午まで家 la cabane に留まった：太陽は焼けつくようになっていた。われわれを迎え入れてくれた人々の一人が小さい男の子たちの方へ進み、そして彼らに次のように言った：“子供たちよ、太陽がお前たちを食べてしまうだろうから、眠りに行け”、と。彼らは叫んだ：“言われる通りだ”、と。そして服従の全くの印として、太陽が彼らの頭を“食べてしまうであろう”ことを承知したあとで、彼らは遊び続けた。

しかし女たちは立ち上がり、一人は木の器（うつわ）の中に玉蜀黍の粉の入っている背負い籠 la sagamité を指し、他の者はお気に入りの果物を指し、第三の者は横になるための莫蓙を拡げる：それぞれの名前に愛情を示

す語をひとつ結び付けて、言うことを聞かない群れを呼んだ。子供たちはすぐに、小鳥たちのように、彼らの母親たちの方へ大急ぎで跳んで行った。女たちは笑いながら彼らを捕まえ、そして彼女たちの各々は彼に与えられたばかりのものを母親の所で食べている自分の息子をかなり苦労して連れ去って行った。

さようなら：私には林地帯の真ん中で認められたこの手紙が何時あなたの所に届くのかは分からない。

私はインディアン達の村からナイアガラの瀑布に赴いた：『アタラ』の終わりに置かれているその瀑布の記述はそれを再生するにはあまりに識られ過ぎているし（cf. P. 1288 の注. 696 の 1. PP. 95-96；『試論』についてはプレイアード版テクスト—IIe partie, chap. XXIII—, P. 358, n.）；その記述は更に『試論』の覚書の一部になっているが；しかしその同じ覚書には私がここで繰り返さなければならないと思っている私の旅の話しに緊密に結び付けられている幾つかの細部がある。

ナイアガラの瀑布にはかつてそこにあったインディアンの梯子が壊されているので、私は案内人の忠告にも拘わらず、２００フィートの高さで聳り立つひとつの岩山を伝って滝の下に行くことを望んだ。瀑布の咆哮や私の下で激しく泡立つ、ぞっとするような深淵にも拘わらず、私は自分の冷静さを失わずに、４０フィートの底に達した。しかしここで、すべすべした垂直な岩山は私の両足がそこで休める草木の根も割れ目もはや提供してはくれなかった。私は片手を思いっきり伸ばして、ぶら下がったままになっており、再び昇ることも降りることも出来ず、私の指が私の体の重みで疲労によって徐々に開かれるのを感じ、そして死が避けられないことを見てとっていた。彼らの人生で、ナイアガラの瀑布の上にぶら下がって、私がその時それらを数えたように、２分間過ごした人間たちは殆どいないで

あろう。ついに私の両手が開かれて、そして私は落ちた。まったく前代未聞の幸運によって、私は剥き出しの岩盤の上にいたのであるが、そこで私は微塵に砕かれなければならなかったかも知れないのに、私はさしたる苦痛も覚えず；私は深淵からほんの僅か離れた所にいて、それでも深淵には転がり落ちてはいなかった：だが水の冷たさが浸透し始めた時には、私が最初にそう思っていたほど容易には助からないということに気付いた。私は左腕に耐え難い苦しみを感じたが、私は肘の下で腕を折っていたのである。上から私を見ていて、私がそれに合図をした私の案内人は数人の未開人たちを呼びに駆けて行き、彼らは非常に苦労して樺の幾つものロープを使って私を上に上げ、そして私を彼らの所へ移した。

それは私がナイアガラに身を晒した唯一の危険ではなかった：到着して、私は自分の片腕に自分の馬の手綱を巻き付けたままで、滝に赴いた。私が下を見ようと身を屈めている間に、一匹のガラガラ蛇が近くの茂みで動いたので；馬は脅えて、後ろ足で立ち、深淵に近づきながら後ずさりする。私は自分の腕を手綱から引き出すことが出来ず、馬は絶えずますます脅え、自分の後ろ向きに私を引っ張って行く。すでにその前足は地面を離れていて；そして深淵の縁（ふち）で、馬はもはや私の腰の力によってしかそこに留まっていなかった。動物は、新たな危険に自ら驚いて、新しい努力をし、片足を軸にぐるりと半回転して内側に倒れ、それでも縁から六尺ほど遠くに駆け出した時には、それは私の努力の成果でそうなされたものではなかった—脚注．A.『試論』, t. II, P. 237. Œuvres comp. —.（cf. P. 1288 の注, P. 697 の 1．これらの椿事は『回想』の livre VII, chap. VIII で再び取り上げられているが，しかし順序は逆になっている）。

私は片腕にごく普通の骨折しかしていなかった：二つの小幅の板と、ひとつの包帯と、ひとつの吊り包帯だけで私の治療には十分であった。私のオランダ人はもっと遠くに行くことを望まなかったので；私は彼に支払い

を済ませ、そして彼は自分の家に戻った。私はナイアガラのカナダ人たちと新しい契約をしたが、彼らはミシシッピー河に沿ったイリノイ地方のセント＝ルイスに彼らの家族の一部がいた。

手書きの原稿は今日カナダの幾つもの湖のひとつの全体的な見取図を提示している（cf. PP. 1288-1289 の注，P. 697 の 2.『回想』—livre VI, 1. chap. 1, t. I, P. 255—はその点について手短かにしか触れていない．しかい国立図書館の手書きの原稿—Ms, fr. 1254. fol. 73—はルヴァイアン氏 M. Levaillant—I, 1064—によって不完全に再現された他の幾つもの細部を示している．われわれはその幾つかの削除箇所と共に，その詳細な in extenso 写しを以下に示す：

《私は支払いを済ませ，そしてオールバニーAlbanny に戻る．私はその家族たちがイリノイ地方のセント＝ルイスに居を構えている農園主たちと親しく交わり；そして私は彼らと一緒に旅を続ける．旅程の六日目に，彼らは激しく言い争う：三つの仲間に分裂して，各々の仲間は異なった道筋を選び；私は—その移動が私の旅の計画にもっとも合致していると思われる—仲間と共に残り，その仲間はオハイオ地方に下る》.

［ここで一行と四分の一に線が引かれ，判読が出来ない］

《ここで，私は諸々の旅行の原型となる元の原稿がひらひらしていて，様々なものが入り混じり，破れ，湿気で蝕まれ，秩序も無く，しばしは読みづらく，（もはや）紙切れ状の塊を呈している（に過ぎない）．そこには［自然についての］様々な記述；日付の無い，時間のそれ以外の記述の無い日記の断片；明らかにマレゼルブ氏宛の植物学に関する覚書が見出される》.

《われわれはエリーÉrié の湖の岸辺から出発したが，そこには今日では地図に記されてないエリー部落 la bourgarde が見られ，そこからマーサーMercer を通ってピッツバイクに下り，または西でオハイオ地方のレ・ラピード川（？）を溯るために現在掘られている運河から遠くないコロンバス Colombusb やチリコート Chillicote（？）に達することが出来る．その地方全体が当時はあまりにも踏査されておらず，そして私の旅程は大変漠然としていて，そこに見出されるもの，辛うじて概略が示されている幾つかの情景のみ

をそこに求めなければならない．私はこうした断片の幾つかを書き写す》）．

Ⅳ。カナダの幾つもの湖（PP. 698-703）の概略

エリー湖の水の過剰なものはナイアガラ瀑布となったあとで、オンタリオ Ontario 湖に溢れ出る。インディアン達はオンタリオ湖の周りでバルサムの木 le baumier（m. 芳香性の樹脂を採る各種の木の総称）の中に薄い薄荷を、楓 l'érable（m.）や胡桃（くるみ）の木 le nover（m.）や白樺 le merisier（m.）の中に砂糖を、プルース la perousse（？）の樹皮の中に赤い染料を、白い木 le bois blanc（？）の樹皮に彼らの藁ぶきの家々の屋根の材料を見出していたし、野生の漆（うるし）le vinaigrier の赤い房に酢を、野生のアスパラガスの花々に蜜や綿を、向日葵（ひまわり）le tournesol（m.）の中に毛髪の油を、すべてに適用される植物 la plante universelle（cf. P. 1289 の注，P. 698 の 1．シャルルヴォワはこの plante universelle について，《その擦り潰された葉があらゆる種類の傷を塞ぐ》ことを述べている—I，P. 272—）の中に様々な傷に対する万能薬を見出していた。ヨーロッパ人たちはこれらの自然の恵みを技術製品によって置き換えた。

エリー湖は百里以上の周辺を持っている（cf. P. 1289 の注，P. 698 の 2．シャルルヴォワは次のように書いていた—III，P. 253—：《エリー湖は東から西に百里の長さがある》，と．そこでそれを大きく見せていると思って，シャトーブリアンはそれをかなり小さくした）。そのほとりに住みついている諸部族集団は二世紀前にイロクオイス族によって皆殺しにされ；幾つかのさすらいの遊牧民たちが、ついで、人々があえて留まらないあちこちの場所に出没した。

そこでは嵐が物凄いその湖で、インディアン達が樹皮の舟に乗って、危険に身を晒すのを見るのは恐ろしい事である。彼らは自分たちの精霊たちを皆カヌーの艫（とも）にぶら下げて、逆巻く波の合間を、雪の旋回する最中に進む。それらの波はカヌーの上部と同じ高さで、あるいはカヌーを乗り越えて、カヌーを呑み込むかのように思われる。猟人たちの犬たちは縁に両足をもたせ掛けて、悲しげな叫び声を発し、その間に主人たちは沈

黙を守って、彼らの櫂（かい）leurs pagaies（カヌーや丸木舟で用いる短くて偏平な櫂）に合わせて波にぶつかる。カヌーは列を作って進む：先頭のカヌーの舳先（へさき）には、調べが高く、そして短い所に最初の母音が、さらに鈍いそして長い調べの所には第二の母音が来るオアーOah という単音節語を繰り返す親方が立ったままでおり、最後のカヌーにさらにもう一人の親方が立って、舵（かじ）gouvernail（m.）の形をした櫂を操っている。他の猟師たち guerriers は足を組んで、カヌーの底に座っている：霧と雪と波を通して、インディアン達の頭がそれで飾られている羽根と、吠える大型犬たちの細長い首と、水先案内人であり、占い師である二人の長老たちの肩だけが目に入る：まるで湖沼の神々のようである（cf. P. 1289 の注，P. 699 の 1. それ以来，『回想』，liv. VIII，chap. I で，《エリー湖は百里以上あり》が再び採り上げられる）。

エリー湖はさらに蛇たちで有名である（cf. P. 1289 の注，P. 699 の 2.《島々の近くで》，そして睡蓮の葉の上で《絡み合っている幾つかの蛇の束》によって湖を覆う睡蓮の記述はカルヴェール—P. 117—から来ている．カルヴェールはその変種を《水蛇 serpent d'eau》と呼び，《それはガラガラ蛇に大変似ているけれど，しかし少しも害は無い》と，はっきり述べている）。この湖の西で、クールーヴル Couleuvre 諸島（？）から大陸の幾つもの川まで、二十マイル以上の広さで、大きな睡蓮が拡がっている：夏には、これらの植物の葉は互いに絡み合っている蛇たちに覆われている。爬虫類たちが太陽の光に当たってたまたま動く時には、紺青や緋色や金や漆黒の彼らのとぐろが巻かれるのが見られ、それらのぞっとするような二重、三重に構成されているとぐろの中に輝く両眼や、三重の舌や、火のような口や、鞭のように空中で揺れ動く毒針や、音のするものを備えた尾だけが識別される。絶え間無いシューシューという音や、森の中のカサカサという音に似た音があの濁ったコキュトス河 Cocvte—ギ神．幾重にも地獄をめぐって流れる河—のような河から出て来る。ヒューロン Huron 湖からエリー湖への通路を開く隘路 le détroit はその名声をその木陰と草原

から引き出している。ヒューロン湖は魚に満ち溢れており、そこではアルティカメーグ Artikamègue(？)や二百ポンドの重さのある鱒類が釣れる(cf. P. 1289 の注，P. 699 の 3. シャルルヴォワは同じ文章の中で，これら二つの魚を引用している—III，282—：《アスティカメーグ Astikamègue（？）または白い魚[———]そしてとりわけ大きな鱒》，と)。マティムラン Matimoulin 島（？）は有名であったが；それはオンタワイス族たち les Ontawais の部族集団の生存者を幽閉していたからで、インディアン達はそれを大海狸（ビーバー）の血を引く者と見做していた（cf. P. 1289 の注，P. 699 の 4. シャルルヴォワにおいてはマニトゥアラン Manitouaran 島についての細かい説明が見出されるが—前提書，283—，シャトーブリアンはその名前を変更した)。ヒューロン湖の水は、ミシガン湖の水のように、七カ月の間に増え、他の月の間には同じ割合で減少するということが指摘された（cf. P. 1289 の注，P. 699 の 5. カルヴェールは二つの湖を分けるミシリマキナク Michillimakinac（？）の隘路で，それらの観察を行なった—PP. 101-102—)。これらの湖は多かれ少なかれ明らかな潮の満ち引きを持っている。

上部湖 le lac Supérieur は北緯４６度と５０度の間で４度以上の空間を、パリの子午線、西経８７度と９５度の間で８度以下ではない空間を占めており；つまり内海は百里の幅と約二百里の長さを持っていて、殆ど六百里の周辺を示している。四十の川がその広大な流域でそれらの水路を結び；それらの川のうちの二つ、アッリニピゴン川 l'Allinipigon とニチピクトン川 le Nichipicouton は重要な川で；後者はハドソン湾の付近にその水源を得ている（cf. P. 1289 の注，P. 699 の 6. カルヴェールは次のように述べている：《二つの大きな川は北と北東において上部湖に流れ込む：一つはフランス人たちによってアッラニプゴン Allanipegon と呼ばれているル・ニペアゴン川 le Nipeagon で「———」；もう一つはミシピクトン Michipicouton 川である．その水源はジェームズ James 湾の近くにあり，そこからハドソン商会 la compagnie de Hudson に所属する砦の方に向かってその湾に流れ込むもう一つ別の川へ移るための河川航行不能（陸路運搬）の個所がある》，と)。

幾つもの島、とりわけ北の沿岸ではモールパ Maurepas 島、東の湖岸では

ポンシャルトラン Ponchartrain 島、南の部分ではミノン Minon 島、西の方ではル・グラン＝テスプリ le Grand Esprit 島またはレ・ザルム les Armes 島が湖を引き立てている（cf. P. 1290 の注，P. 700 の 1. シャルルヴォワの日記—t. III，P. 276—とカルヴェールの著書—P. 1—に付録として付いている折り畳み式の地図にははっきりとこれらの島々，特にモールパ島とポンシャルトラン島が見られる．ル・グラン＝テスプリ島はロワイアル Royale 島またはフィリポ Philipeau 島と名付けられている．北から来る二つの川はそれと分かる名前でカルヴェールによって示されているが；彼は 94-95 ページに亘って，場所の記述と一覧表を提示しており，そこにシャトーブリアンは続く幾ページにも亘る多くの細部を求めた）；後者はヨーロッパにおいては一国の領土を構成し得るものであり、それは長さ三十五里、幅二十里となる。

その湖の注目すべき岬は次の通りである：キウクナン Kioucounan 岬の端は一種の地峡のようなもので、湖水の中を二里も伸びており；ミナボージュー Minabeaujou 岬はひとつの灯台に似ており；トネール Tonerre 岬は同じ名前の浅い入江の近くにあり、ロシュドゥブール Rochedebour 岬は壊れたオベリスクのように、砂州の上に垂直に聳えている（cf. P. 1290 の注，P. 700 の 2. シャルルヴォアの地図では—先の注を見ること—，南に大きなキウクナン半島，北東に，ミナボージュー岬，北西にトネール湾が見られる．ロシュドゥブール岬は完全に西にある．南の岸辺の記述の用語を提供したのはマッケジー Mackenzie である—『セント＝ローレンス河の旅』Voyage sur le Fleuve Saint-Laurent，1801，PP. XL と XLI—）。

上部湖の南の岸辺は低地にあり、砂地で、風雨を避ける所が無く；北と東の沿岸は、反対に、山が多く、そして切り立った形の一連の岩山を見せている。湖自身岩が掘り下げられたようになっている。緑色の、透明な水を通して、30，さらには 40 フィート以上の深さの所に、花崗岩の堆積が見てとれるが、異なった形のその幾つかは職人の手で新たに鋸挽きされたかのような姿を見せている。旅人がカヌーを漂流させて、縁（へり）の端に身を屈めて水中のそれらの山々の頂を見つめる時には、彼は長い間その光景を楽しむことが出来ず；彼の両眼は霞み，そして彼は目眩を覚える（cf. P.

1290 の注．P．700 の 3．それらの《刻まれた石の外観を呈している，異なった石の巨大な柱》はまたも書き留められているカルヴェールによって次のように記述されている―P．126―：《数分後に頭がくらくくらして，これ以上長く耐えることが出来ないのを感じないでは，底の岩々を見つめることは私には出来なかった》，と．カルヴェールの話しの独特な形にシャトーブリアンによって用いられた《旅人が―――》という慎重な表現が対比されることになる》）。

湖沼のこの豊富な貯蔵庫の拡がりに強い印象を与えられた想像力は空間と共に増大する：あらゆる人間に共通な本能に従って、インディアン達はこの広大な水盤の形成を丸天井に丸みを付けるのと同じ力に帰し；彼らは上部湖の眺めが抱かせる感嘆の念に宗教的な理念の厳粛さを加えた。

それらの未開人たちは自然がそのもっとも見事な作品のひとつに好んで与えた神秘的な外観によってその湖を彼らの崇拝の対象とすることに心を惹き付けられた。上部湖は不規則な潮の満ち干（ひき）をする：夏の最高の暑さの中で、その水は水面下半フィートの所で雪のように冷たくなり（cf. P．1290 の注，P．700 の 4．カルヴェールはまた水は《深さ約一尋（ひろ）で非常に冷たく、それを口に持って行くと，それは氷塊と同じ感覚を覚えさせる》，と書き留めている―P．91―）：それらの水は、海が凍る時でさえ、気候のもっとも厳しい冬にもめったに凍らない。

湖の周りでの土地の諸々の植物は異なった土壌に従って変化する：東の沿岸では、砂の中に殆ど水平に伸びる、痩せこけてそして曲がった楓の森だけが見られ；北側では、剥き出しの岩が、植物に幾らかの峡谷と幾らかの谷の裏側をそこに残している到る所で、刺の無いスグリ類 groseilliers の茂みと、苺の実に似た、しかももっと青白い薔薇色の果実を付けている一種の葡萄の木の房々が認められる（cf．P．1290 の注，P．701 の 1．カルヴェールは《黒と赤のスグリ達》について述べ，そして《その葉が葡萄の木のそれにとても似ている潅木の上に伸びる》，あの《より薄い赤色の木苺》の描写をしている》）。あちこちに、孤立した松の木々が立っている。

これらの人気の無い場所が見せている数多くの風景の中で二つのものが特に人目を引く。サント＝マリ Sainte-Marie の峡谷から上部湖へ入ると、半円形に身を屈めて、花の付いた木々がすっかり植え付けられて、その根元が水に浸っている小さな森に似ている島々が左手に見られ；右手には大陸の幾つもの岬が波の中に突き出ており；その幾つものものは空と水の二重の紺青をその緑に組み合わせる芝生に覆われており、その他の幾つもののものは赤や白の砂で構成されていて、青みがかった湖を背景にして、寄せ木細工の工芸品の幾つもの輻射線に似ている。これらの長い、剥き出しの幾つもの岬 caps（m, pl.）の間に、その下の透明さに逆さにされて反復される林に覆われた、幾つもの大きな岬 promontoires（m, pl.）が混じり合っている。また時折、密集した木々が沿岸で厚い帳を形造っており；そして時折、疎らに生えた木々が、並木道のように、陸地に沿って進み；その時それらの離れた幹が驚くべき幾つもの視覚の基点を見せてくれる。諸々の植物、諸々の岩山、諸々の色彩は風景が、視界から遠ざかったり、視界に近づいたりするにつれて、均整を減じたり、または色調を変えたりする。

南にあるこれらの島々や東にあるこれらの岬 Promontaires は互いに西の方に身を屈めて、雷雨がこの湖の他の諸地域を混乱させる時には、広々とした、静かな錨地を造り上げ、そして抱きしめる。あちらでは無数の魚や水鳥が遊んでいる：ラブラドル半島の黒い鴨が岩礁の先端に止まっており；波浪がそれらの白い泡の花飾りの喪服でその単独行動をするものを取り囲み：幾羽ものアビ plongeon（m.）が姿を消したかと思えば、再び現われ、さらにまた姿を消し；湖の鳥は波の表面を滑翔し、そしてカワセミ le martin-pecheur（m.）はその獲物を幻惑するために紺青の羽根を急速に動かす。

サント＝マリの隘路の出口にあるその錨地を隠している島々と幾つもの岬の向こうに、視線は捕らえ難い、そして湖との境界の定かでない諸平原を不意に捕らえる。これらの平原の変わり易い表面は拡がりの中で徐々に

高くなり、そして消える：エメラルドの緑からそれらの表面は薄い青に、ついでウルトラマリーンに、ついで藍色に移る。各々の色調は互いに溶け合い、最後の色調は地平線で終わり、そこで最後のものは暗い紺青の一本の筋となって空に繋がる。

その景色は、湖自体においては正に夏の景色であり；晴れやかな時には、その風景を楽しまなければならない：第二の風景は反対に冬の風景であり；それは嵐の吹きすさぶ、そして葉の落ちた時期を求める。

アッリニピゴン Allinipigon 川（？）の近くでは、湖を見下ろす、巨大な、孤立した岩山が屹立している。西では、一連の岩山が、あるもの達は横たわり、他のもの達は地面に突っ立ち、後者はそれらの無愛想な尖峰で、前者はそれらの丸みを帯びた頂で空気を貫いて、拡がっており；それらの緑や赤や黒の脇腹はそれらの割れ目に雪を留め、そのようにして花崗岩 les granits や斑岩 les porphyres の色に雪花石膏 l'albâtre を混ぜ合わせる。

ピラミッド型の木々の幾つかがそこに生長している: 松が幾つもの岩礁の台座 les plinthes（f.）の上に立っており、そして氷塊のような刺のある草々がそれらの崖っ縁の道から物悲しげに垂れ下がっている。

私が描いたばかりの岩山の連なりの背後で、一本の畝のように、狭い谷が貫いている。トンボーle Tombeau 川がその真ん中を通って流れている。その谷は夏にはぶよぶよした、黄色い苔しか見せておらず; 様々な色彩の帽子で、菌類 fongus（m.）の幾つもの小花柄（しょうかへい）rayons（m, pl.）が幾つもの岩山の隙間の輪郭を浮き上がらせている。冬には、雪で満たされたその人気の無い場所で、猟人は霧氷 frimas（m. pl.）の白さのおかげではっきりと示されている鳥や四足獣たちを前者は色の付いた嘴や後者は黒い鼻面や血の色をした両眼だけで発見することが出来る。谷の先端にそして遠く向こうに、極北の山々の頂が見られ、そこには神は北アメリカの四つの最大の河の水源を置いた（cf. 1291 の注, P. 703 の 1. ミシシッピー河とセント＝ローレンス河については正確な, その《誤った地理書》はすべての人々にと

って同じではなかった．カルヴェールは北の方に流れるブルゴン Bougon 川—英語ではネルソン Nelson 川—と，その水源がミシシッピー河のそれに近く，彼の地図で目につくオレゴン l'Oregon またはウエスト l'Ouest 河を挙げている．そしてシャルルヴォワの著書の第一巻に添えられた，1793 年の日付の付いたひとつの『北アメリカ地図』une carte de l'Amérique septentrionale については，セント＝ロレンス河の支流である、（オンタワイス Ontawais 川ではなく）現在のオッタワ川 Ottawa である，ウタワイス Outawais 川は正常に南の方に流れている．その地図にはウエスト河は見れらるが，その流れはその方向を示す幾つもの矢印で縁取られている．ウエスト河は上部湖の西に位置する名も無い湖から出ていて，レ・ボワ les Bois 湖やウニピゴン Ounipigon 湖を横切って，それを越えてはその河は調査されていなかったが，しかし未開人たちが—地図 la carte に従って—その河が潮の満ち干を受け始めていると主張している場所までその流れを続けているように思われる．ロッキーLa Rocheuse 山脈はそれ故 1745 年にはインディアン達や探検家たちには知られていなかった．カルヴェールはロッキー山脈の山々を《輝く山々》として描いている．そこにはすでに四つの大河が出て来る『アタラ』の P. 33 を見ること）。それらの大河は、同じ発祥地で生まれて、1200 里の流れのあとで、地平線の四つの地点で、四つの大洋に混じり合うことになる：ミシシッピー河は、南で、メキシコ湾に姿を消し；セント＝ローレンス河は、東で、大西洋に流れ込み；オンタワイス河は、北で、北極海に突進し、ウエスト河はノントウカ洋 l'Ocean Nontouka（—脚注．それはその時代の間違った地理学に基づくものであった：その地理学はもはや同じものではない—）にその貢物を齎す。

幾つもの湖のこの一瞥のあとで、時間の表示しか記載していない日記の始まりがやって来る。

V。日付の無い日記—PP. 703-724—の梗概（P. 1291 の注．P, 703 の 2．国立図書館の草稿 Ms. fr. 12454. fol. 46-48 は一人の筆耕の手書きの原稿を含んでおり、そこではその筆耕の幾つもの基礎原理 les éléments が再び見出される．問題となるのはその一節の下書きである．ルヴァイアン氏 M. Levaillant は『回想』の彼の版

—Flammarion 版，I，PP. 322-324—にそれを挿入していた．われわれは幾つもの借用の個所に従って，それを諸々の断片に細かく切るよりも，ありのままにそれを刊行することを選んだ)。

空は私の頭上で澄んでおり、微かな微風の前を速やかに走り去る私のカヌーの下で、水も澄み切っている。私の左に、垂直に刈られ、白や青の花の付いたサンザシヒルガオ convolvulus（m.）や、ツリガネカズラ bignonias（m. pl.）や、長いイネ科植物 graminées（f. pl.）やあらゆる色彩の岩上に生える植物たち les plantes saxatiles（f. pl.）の花綱 festons（m. pl.）がそこから垂れ下がっている幾つもの岩山がそそり立って、側面を固めている幾つもの丘があり；私の右には、広大な草原群が君臨している。カヌーが進むにつれて、新しい光景や新しい眺望の数々が開ける：ある時はそれらは人気の無い、目に快い、幾つもの谷であり、ある時は幾つもの草木の無い丘であり；こちらではそれはそれが陰気な幾つもの柱廊 les portiques のように見えてくる糸杉 cyprès（m.）の森であり；あちらではそれは楓 érables（m, pl.）の軽やかな林で、そこでは太陽がレース越しのように戯れている。

原始の自由、私はついにお前を再び見出す！私の前を飛翔し、行き当たりばったりに通路を見つけ、そして幾つもの林の茂みによってのみ通行の妨げられるあの鳥のように、私は移動する。

晩の七時

われわれは川の分岐点を横切り、そして南東の支流に沿って進んだ。われわれは運河に沿って、われわれが下船出来る入江を捜していた。われわれはユリノキ tulipiers（m. pl.）の小さい林に覆われた岬の所に入り込む。われわれはカヌーを陸地に引き上げて移動させたあとで、ある者たちはわ

れわれの火を起こすために乾いた枝を集め、他の者たちは木の葉で葺いた小屋 l'ajouppa を準備した。私は銃を取り、そして近くの森に入り込んだ。羊歯（しだ）fougères（f. pl.）の漿果 les baies（f. pl.）やナナカマド aliziers（m. pl.）の実を食べることに専念している一群の七面鳥たちに気付いた時に、私はそこまで僅かしか離れていなかった。それらの鳥はヨーロッパに移入された彼らの同類の鳥たちとはかなり異なっている：それらはもっと肉づきがよく、それらの羽毛は青みを帯びた灰色で、首と背に艶があり、翼の先端で赤褐色になっており；光の反射に従って、その羽毛は褐色がかった金のように輝いている。これらの野生の七面鳥はしばしば大きな群れで集まっている。晩には、それらはもっとも高い木々の頂に止まる。朝になると、それらはそうした木々の上からそれらの反復される叫び声を聞かせ；日の出のすぐあとに、それらのどよめきは終わり、そしてそれらの森林地帯に降りて来る。

われわれは涼しいうちに出発するために、朝早く起き；荷物類は再び舟に積み込まれ；われわれはわれわれの帆を上げた。われわれの両側には、森林地帯に覆われた、盛り上がった大地があり；草の茂りは想像し得る限りのあらゆる濃淡を示していた：薄れて行く緋色は赤に、濃い黄色は輝く金色に、強い褐色はあっさりした褐色に、薄められた緑、白、紺青は程度の差はあれ弱い、程度の差はあれ鮮やかな無数の色調に。われわれの近くでは、それはまったく多彩のプリズムであったし;われわれの遠くでは、谷の曲がり角で、数々の色彩が混じり合い、そしてビロードのような様々な背景の中に消えていた。木々はそれらの形を全体として調和させており：ある木々は扇状に拡がり、他の木々は円錐型に立っていたり、また別の木々は珠のように丸みを帯び、そのほかの木々はピラミッド型に削られていた：しかしそれらを記述しようと努めずに、その光景を楽しまなければならない。

朝の十時

われわれはゆっくりと進む。微風は止み、そして運河は狭くなり始める：天候は雲で覆われている。

正午

カヌーでもっと上流まで遡るのは不可能で；今やわれわれの旅行のやり方を変えなければならず；われわれはカヌーを陸で引っぱり、われわれの食料の貯えや、われわれの武器類や、われわれの毛皮を夜のために選び、そして林地帯に入り込むことになる。

三時

地球と同じように古く、それが神の手から生じた時のように、それだけで創造のことを考えさせるこれらの森林地帯に入りながら、誰が体験によって学ばれる気持を伝えられるだろうか？　日は葉の茂みのヴェールを通して上から射して、変わり易く、不安定で、様々なものに幻想的な大きさを与える半透明な光 demi-lumière を林の奥深くに拡める。到る所で、打ち倒された木々を乗り越えなければならないが、それらの上に他の幾世代にも亘る木々が聳え立っている。私は虚しくこれらの人気の無い場所でひとつの出口を探し求め；より鮮やかなひとつの光に欺かれて、私は草原や、イラクサ les orties（f. pl.）や、苔や、ツル草 les lianes（f. pl.）や、植物の残骸によって構成されている厚い腐食土 l'humus（m.）を横切って進むが；しかし私は倒れた幾本かの松によって形造られているひとつの林間の空地 une clairière にしか達しない。間もなく、森はさらに暗くなり、次々と続く、そして遠ざかるにつれて、身を寄せ合っているように見える幾つ

もの楢 chênes（m, pl.）やクルミの木々noyers（m. pl.）の幹だけが目にとまる：無限という思いが私に生ずる。

六時

私は再び明るさを垣間見て、そして私はその明るさの方へ歩んでいた。こうして私は光の中心点にいる：それを取り囲む森林地帯よりももっとうら淋しい野原だ！その野原はひとつの古くからのインディアンの墓地である。死と自然のその二重の孤独の中で、私は一瞬安らぎを得る：それは私が永遠に眠ることを一層好むような安らぎの場所なのか？

七時

それらの林から出ることが出来ないので、われわれはそこで野営した。われわれの薪の山の反射が遠くに拡がり；猩紅熱のようなきらめきによって下を照らされた葉叢は血に染められているように思われ、もっと近い木々の幹は赤い花崗岩の円柱のように聳え立っているが、もっと離れているものには辛うじて光が届き、林の奥で、深い闇の縁で輪になって並んでいる青白い幻影に似ている。

真夜中

火は消え始め、その光の輪は狭くなる。私は聞き耳を立てる：恐るべき静けさがこれらの森に重くのしかかり、まるで沈黙が沈黙に続いているようである。私は虚しく生 vie を現わす何らかの物音をありきたりの墓で耳にすることを求める。そのため息は何処から来るのか？ 私の仲間たちの一人からか？ 彼は微睡んでいるにも拘わらず、不平を漏らしている。君は

生きている、だから君は苦しんでいるのだ：それこそ人間だ。

午前０時

休息は続くが；だが老化した木は折れる：それは倒れる。森林地帯は唸り；無数の声が湧き起こる。間もなく、物音は弱まり；それらは何処とも知れぬ彼方に消える：沈黙が再び荒野に侵入する。

午前一時

風が起こり；それは木々の頂の上を駆け巡り；それは私の頭上を通って、木々を揺り動かす。今やそれは物悲しく岸辺に砕ける海の波のようである。

幾つもの物音が幾つもの物音を目覚めさせた。森全体が妙なる調べである。私が耳にしているのはオルガンの重々しい音であるのか、それともより軽やかな音が青葉の穹窿の中を彷徨っているのか？ ひとつの短い沈黙が続き；空中の音楽が再び始まり；到る所に優しい呻き声やそれ自身の中に他の呟きを閉じ込めている呟きがあり；それぞれの葉は異なったことばを話し、それぞれの草の若芽はひとつの調べを特別のものにする。

異様なひとつの声が鳴り響く：それは牡牛の啼き声を真似るあの蛙の声である。森の四方から、葉にしがみついている蝙蝠が単調な鳴声を上げる：まるで切れ目の無い幾つもの弔鐘またはひとつの鐘の葬送の音（ね）を聞いているようである。そうした観念が生 la vie の奥底にあるので、すべてがわれわれを死に想いを馳せる何らかの考えに再び連れ戻す。

午前十時

われわれは再びわれわれの旅路を続けた：水浸しになった谷を下り、イ

グサ jonc（m.）の根から拡がっている樫柳 chêne-saule（m.）の枝々は沼を渡るための橋としてわれわれの役に立った。われわれが間もなくわれわれの探している川を発見するためによじ登ることになる、林に覆われているひとつの丘の麓でわれわれは自分たちの夕食の準備をする。

一時

われわれは再び歩き出したが、雷鳥たち les gélinottes がその晩のためにおいしい夜食を約束する。

道は険しく、木々は稀になり；滑り易いヒース une bruyère が峰の側面を覆っている。

六時

やがてわれわれは頂上にいる：われわれの下には木々の頂だけが見えてくる。孤立した幾つかの岩山が、水の表面に立っている岩礁のように、その緑の海から出ている。樅の一本の枝に吊るされている一匹の犬の骸骨がその荒野の守護神に捧げられたインディアンの生贄を示している。ひとつの急流がわれわれの足元に突き進み、そしてひとつの小さい小川に消えて行く。

朝の四時

夜は穏やかであった。われわれにはこれらの林に一本の道を見つけるという期待が持てなかったので、われわれは舟に戻る決心をした。

九時

われわれはサンザシヒルガオ convolvulus（(m.）にすっかり覆われ、そして幅の広いセイヨウカボチャ達（m.）によって侵食されている古い一本の柳の木 un saule の下で朝食を取った。蚊たち maringouins（m.）がいなければ、その場所は大変快適であったであろうが；われわれの敵たちを追い払うために、生（なま）の薪で大きな煙を出さなければならなかった。案内人たちはわれわれのいる場所から歩いてまだ二時間はかかる所にいる旅人たちが来ることになると告げた。この感覚の鋭さは奇跡に等しい。地面に耳をつけて、四・五時間の距離のある所にいる他の一人のインディアンの足音が聞こえるようなインディアンがいる。われわれは二時間経って未開人の一家族が到着するのを見たが；その家族は挨拶の叫びを発した：われわれはそれに喜んで応えた。

正午

われわれの客人たちは二日前からわれわれのことが分かっており、彼らはわれわれが歩きながらたてる物音がインディアン達によってなされる物音よりも著しいので、われわれが白人たちであることを知っていたとわれわれに教えてくれた。私がその相違の原因を尋ねると、それは枝を折ったり、ひとつの道を自分たちのために切り開くやり方に原因があるのだと彼らは私に答えた。白人はその人種がその足音の重さで分かり；彼が惹き起こす物音は徐々に大きくなることはない：ヨーロッパ人は林地帯で曲がり；インディアンはまっすぐに歩く。

インディアンの家族は二人の女たちと一人の子供と三人の男たちで構成されている。一緒に舟に戻って、われわれは川のほとりで大きな火を焚いた。相互の好意がわれわれの間を支配する：女たちは紅鱒と太った七面鳥から成るわれわれの夜食を準備した。われわれ他のメンバー達 guerriers は

一緒に煙草を吸い、食物を分ける。翌日、われわれの客人たちはわれわれのいる所から五マイルしかない川にわれわれが自分たちのカヌーを運ぶのを助けてくれた。

日記はここで終わる。次にある切り離されたページはわれわれをアパラチヤ山脈の真ん中に運んでくれる。

次のようなことが書かれている：

これらの山岳はアルプス山脈やピレネー山脈のように互いに不規則に重ねられた雲の上に雪で覆われた山脈を高くしている山々ではない。西と北でそれらは数千フィートの垂直な壁に似ており、それらの高みからオハイオ川やミシシッピー河に下る水流が落ちている。この種の大きな断層には、幾つもの急流と共に幾つもの絶壁の中間を蛇行している幾つもの小道が認められる。これらの小道や急流は一種の松で縁取られており、その頂は海の緑の色で、殆ど藤色のその幹は平らな、黒い苔で生じた斑点で印づけられている。

しかし南と東の側では、アパラチヤ山脈は殆ど山脈の名に値しないようになる：その山脈の頂上は大西洋に沿って続く地方に向かって徐々に低くなり；その山脈では緑の楢や、楓 éables（m. pl.）や、胡桃の木 novers（m. pl.）や、桑の木や、マロニエや、松や、樅や、フウ copalmes（m. pl.）や木蓮 magnolia（m.）や、無数の種類の花を付けた小潅木の森林地帯を肥沃にする他の河川がその地方に注いでいる。

（うつみ・としろう　元商学部教授）